

房総きのこ今昔

その1

●八街市の笹間幸雄さん68歳より、2017年12月21日、吹春俊光が聞き取り

両親は明治3年に八街の開拓に携わり、それ以来八街市に住んでいる。八街の飛行場跡*に、クロマツを植えたところできのこが採れた。当時は実住(みすみ)小学校に通っており、全校生徒は350人くらい、昭和20年代の小学校の遠足で、年1回マツ林に行き、ハツタケ、アカハツ、ショウロを採った。採ったものはススキに刺して自宅に持ち帰った。子供の遊びとしても、きのこ狩りに行った。

* 昭和16年開設の陸軍八街飛行場(下志津陸軍飛行学校八街分教場)。終戦により閉鎖され、食糧増産のため農地として開墾された。

その2

●稲毛区山王町の池川正子さんより、2019-2020年頃、吹春俊光が聞き取り

泉新田*1(現在の印西市泉)のマツ林で食用の「ほんきのこ*2」を採って食べていた。秋の雨上がり、「ほんきのこ」は薄い茶色で、裏は肌色をしていた。混ぜご飯にして食べた。ほかにはツルタケ(白いもの)*3を食べていた。

*1 泉新田は、幕府直営の牧場であった小金牧のうちの印西牧の一部。現在も泉新田大木戸野馬堀遺跡とよばれる野馬除けの土手跡が保存されている。

*2 「ほんきのこ」は千葉県の方言でハツタケのこと。

*3 猛毒のドクツルタケとはきちんと区別されていた。

□

[図書紹介]

■ 森の天界図像 わがアイコン孢子紋 渡辺隆次きのこ画文集

著者：渡辺隆次、出版社：大日本絵画、2021年2月12日発行、96頁、ISBN：978-4-499-201001 C 0071、2200円(+税)。

山梨県甲府市にある武田神社の菱和殿の天井画(会報20号、24-25頁に紹介があります)や、『きのこの絵本』(ちくま文庫、1990年)で有名な著者の、生涯にわたって絵を描き続けた、その理由について書いてあります。「私が描いているような絵は、めったに売れることはない。(中略)しかし私には、絵筆を手放すことはできない。それは死に等しいのだから」。東京から八ヶ岳山麓に移り住んだ著者は、森の中できのここと出会います。その後、渡辺さんの絵には繰り返し「孢子紋」のモチーフが登場するようになるのですが、そこにどんな意味が込められているのか。きのこのことを毎日考えている会員のみなさん、是非、本書を手にとりて考えてみてください。(吹春俊光)

